［実践発表］

表現と伝えあい（保育内容Ｂ）授業実践報告：身近な素材やものを用いた表現活動

中島　恵・小森谷　一朗
（保育学科）

Ⅰ．テーマの設定とその背景

保育内容Ｂでは、「表現と伝えあい」を基本テーマとして活動を展開してきた。平成26年度から、「劇あそび」を柱におき、総合表現的活動ともいえる「劇づくり」を通した保育実践をし、主に、授業内では、互いに表現し、伝え合い、遊びを展開していく中で、自らが体験を通して、その意味を理解することを目的として実践してきた。また、令和３年以降は、コロナ禍で学外活動や実交流が制限される中、学内でできる保育実践を想定した表現活動「協働する、共に作り上げることで深化する人間関係」や、その表現活動における製作の過程をも重視した、「表現活動を通して培われる人間関係や協働する心」を目標とし、その中で、実体験から得る「実感」を大切に活動してきた。子どもは、人的環境あるいは物的環境との関わりを通して、日々学び成長していく。保育者養成校に所属する学生もまた、音楽や造形表現を含む保育内容「表現」の中で、同じ目標やねらい、種々の環境と向き合い、共に協力し、試行錯誤を重ね、学び合いを通して、共に創り上げる経験から獲得する「協働性」と、それを育むプロセスの中で、互いに気持ちを通わせる「伝え合い」を体験してきた。

学生が保育を実施する上で基準となる３指針･要領解説の領域「環境」の内容では、「身近にある物や遊具、用具などを使って試したり、考えたり、作ったりしながら、探究していく態度を育てることが大切である。」と記述され保育者の意図的な環境の構成の重要性が示されている。また、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の「豊かな感性と表現」では「心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。」と記述され、結果重視ではなく遊びや体験の過程を大切にした表現活動のあり方を念頭に置いた保育の重要性が明記された。このことから、令和６年度は「身近な素材やものを用いた表現活動」をテーマとして授業を展開し、より専門性の高い保育者養成の授業を目指した。

Ⅱ．授業構成

保育内容Ｂでは「１．児童文化財による表現」「２．ボディパーカッションによる表現活動、身近なものを用いた表現活動」「３．多様な表現を体験する劇遊び」の三つの柱を基盤として授業を展開した。授業では、冒頭のオリエンテーションにて、５領域との関わりを示す関係資料「保育内容「領域」の総合化」による説明からスタートし、学生自ら実践を通してそれぞれの体験がもたらす５領域の学びや、それらが総合化されていることを具体的なプログラムの体験から学ぶことができるよう構成した。

表１　保育内容Ｂ授業内容

回	授業内容
1	オリエンテーション　児童文化財を使用した表現
2	児童文化財を使用した表現の発表
3	園児にむけて発表（わかくさ幼稚園）
4	ボディパーカッションによる表現活動、身近なものを用いた表現活動　選曲と練習
5	身近なものを用いた表現活動　練習と園児の参加部分の工夫
6	園児に向けた発表とリズムあそび（わかくさ幼稚園）
7	園児に向けた発表とリズムあそびの振り返り
8	映像視聴による表現活動の理解と実践
9	グループでの選曲と実践
10	ストーリー作り
12	小道具や効果音などの工夫
13	劇遊びの実践、修正
14	ピーターパン北中山園の園児との劇遊び
15	劇遊びの振り返り　まとめ

Ⅲ．授業実践

１．児童文化財を使用した表現

１回目の授業では、オリエンテーション後に学生を３つのグループに分けて、今後の活動の見通しを伝えた。幼稚園での授業実践に向けて、まずはこれまでの実習や授業で製作、使用した児童文化財を用いた表現活動の実践について確認をした。

この活動は園児にとっては「文化と表現に出会う体験」であり、学生・保育者にとっては「実践を通して学ぶ専門性の形成」となり、相互に育ち合う学びの場になる。児童文化財を媒介とすることで、単なる発表ではなく、「子どもの主体性・感性・表現を育てる保育の本質」に迫る実践となる点に、ねらいと効果があることから授業序盤の取り組みとした。

２回目の授業では、リハーサルを兼ねて受講している学生の前で、実際に児童文化財を使用して発表を行った。実習で経験を積んでいることもあり、園児への言葉がけや次の発表に移る際の話し方などグループ学生と協力しながら役割分担をしていた。

３回目の授業では、実際にわかくさ幼稚園を訪問し児童文化財を使用した表現活動を実践した（表２）。各グループの発表内容では、野菜にまつわるクイズ、歌、スケッチブックシアター（Ａグループ）色に関連する自己紹介、歌、手遊び（Ｂグループ）、食べ物に関するクイズ（最後にキャベツ）、キャベツに関連する手遊び、絵本などテーマを設定して流れを組み立てていた。

わかくさ幼稚園では、園児に問いかけをしながら児童文化財を披露する姿や、クイズの回答をする際に大きな声で返事をしながら手をあげる園児の姿をほめながら活動をする様子が随所に見られた。「くいしんぼうのごりら」のパネルシアター（図１）では、パネルを持つ学生が膝立ちになり、園児の目線にあった位置を意識しながらアシスタントをしていた（図２）。また、ごりらの食べ物をシルエットにして問いかける様子もあり、園児が参加しながら楽しめる応答性のある表現を実践していた。

表２　児童文化財による表現　各グループの発表内容　わかくさ幼稚園

Aグループ
自己紹介 野菜のシルエットクイズ 野菜の歌 八百屋さんの歌（スケッチブックシアター） 紙皿シアター（シルエットクイズ） パネルシアター（食いしん坊のゴリラ）
Bグループ
自己紹介…自己紹介ブックを使って名前と好きな色を答える。 「どんな色が好き」の歌…マイクを使って子どもに好きな色を質問し、歌う。 「はじまるよ」の手遊びをする。 紙芝居を読み聞かせする。 ・最後に次の活動にも期待がもてるような言葉掛けをして終わりにする。
Cグループ
自己紹介（名前と好きな色などを言う） 質問コーナー（子どもに手をあげてもらって質問してもらう） シルエットクイズ（食べ物のペープサート、最後にキャベツを出題） 手遊び（キャベツの中から） 絵本（キャベツくん） 振り返り

図１　パネルシアター実演

図２　園児の目線を配慮したアシスタント

図３　スケッチブックシアター実践

「やおやのおみせ」のスケッチブックシアター（図３）では、うたのリズムに合わせて「あるある」とやりとりできる題材となっており視覚的にもわかりやすく、身近な野菜を題材にした表現あそびを実践していた。この授業回のねらいにあるように、「実践を通して学ぶ専門性の形成」の場になっていた。

２．ボディパーカッションによる表現活動および身近なものを用いた表現活動

①ボディパーカッションによる表現活動

ボディパーカッションとは体全体を打楽器（パーカッション）にして、リズムを奏でる音楽である。それは「楽器がなくても、音符が読めなくても、歌が上手に歌えなくても誰もが音を楽しむこと」ができるため就学前の子どもでも十分に楽しめる音楽表現である。授業では、「ルパン三世」のボディパーカッションの映像を視聴し、基本のリズムを学んだあとにグループに分かれて、発表を行った。楽器を使わなくても、十分に音楽やリズムを楽しめることを実感することができた。

②リズム教材の製作

３グループに分かれて歌（音楽）とリズムを奏でる身近な素材（教材）選びから始めた（表２）。身近な素材を使用するにあたり、それまでの授業実践が参考になった。学生の持っている知識や経験だけでなく、動画視聴から学んだ素材の使い方を参考にする様子が見られた。例えば、トイレットペーパーの芯は長くつなげると、低い音になり短くなると高い音になることをあらかじめ学ぶことによりつなぎ合わせる数によって、子どもの操作しやすさや、音の調和のおもしろさが味わえるような工夫が見られた。

また、歌指導についても、子どもたちに歌詞やリズムが分かりやすいように、模造紙に歌詞とリズムのマークをつけて「鳴らすところ」「休むところ」を可視化する歌詞カードを製作し、当日に臨んでいた。グループによって同じ紙コップを使用して、マラカスの楽器や風船を貼り付けて太鼓にするなど、子どもの好奇心を刺激するような手作り楽器が製作されていた。マラカスも紙コップの素材だけでなく、ペットボトルのキャップを利用するなど、リサイクルできる素材も利用しながら製作していた。この経験は保育者になるうえでも、試行錯誤をしながらも他者と協働し、子どもにとってよりよい教材環境を提供する資質を高める経験となった。

表３　グループごとの歌のテーマと身近な素材を利用したリズム教材

グループ	歌・音楽	リズム教材（身近な素材）
Ａグループ （学生７名）	アイアイ アンパンマンのうた ミッキーマウスマーチ	紙コップ トイレットペーパーの芯 ビニールテープ 模造紙（リズム指導用）
Ｂグループ （学生７名）	やきいもグーチーパー おもちゃのチャチャチャ きのこ 夢をかなえてドラえもん	紙コップ 風船 テープ
Ｃグループ （学生７名）	サンサン体操 アイアイ しあわせなら手をたたこう	スズランテープ キャップ 20 個 風船 ビーズ

③わかくさ幼稚園での園児とリズム遊びの体験活動

前段階として児童文化財での表現活動を行っていたが、２回目に訪問してすぐにうたやリズムの指導ではなく、まずは導入から始めた。Ａグループでは、園児からは見えない

図４　身近なものの音当てクイズ

図５　歌詞とリズムが記載されている補助教材

ようにお菓子のふたで作った囲いの中で音を鳴らす「身近なものの音当てクイズ」から始めた。普段聞いたことがある音であるが、耳で聞くだけではなかなかものをあてることは難しいので、園児は集中して聴き入る様子が見られた（図４）。また、大きな模造紙に歌詞とリズムが記載されており、初めてのリズム遊びであったが補助教材の効果がみられる実践となった（図５）。

３．劇遊びによる表現活動

劇遊びは､園によって内容は様々であるが、従来から多くの幼稚園・保育園等で「生活発表会」などとして取り組まれている。しかし、その多くの場合、参観者である保護者を喜ばせたり、保育者の指導に重点を置いたりする傾向があり､「見せるための劇」になっている現状がある。本来、幼児教育において子どもに学びを育むための「劇遊び」とはどのようにあるべきなのであろうか。「見せるための劇」は、決められたことを決められた通りに行う「劇」であり､これから学ぶ「劇遊び」とは大きく異なる。「劇遊び」においては、子ども一人一人が自信をもって表現したり、友達と協力して創りあげる喜びを感じたりしながら、達成感や所属感を味わうことのできる活動でなければならないと考える。

そこで、本授業の劇遊びによる表現活動の授業展開を４時間扱いで以下のように設定し取り組むこととした。

①劇遊びの捉え・台本づくり（1/4）

はじめに、先にも述べた通り「劇」と「劇遊び」の違いを明確にし､「劇遊び」の目的について確認した。そして、子どもが体験するであろう「劇遊び」を学生一人一人が体験することにより、子どもには「どのような学びがあるのか」「どのようなことを考えて今後指導していけば良いのか」といったことを学ぶ場になることを確認した。その後、３歳未満児を招待して劇遊びを行うことを伝えた。加えて､「学生同士で相談してテーマを決めて３グループに分かれて３部構成で劇遊びを計画・実施すること」「１部につき７～８分で構成する（全体で30分程度)」「大道具や小道具、効果音の工夫をすること」「３歳未満児参加型の劇を計画すること」「これまでの学び（児童文化財やリズム教材）をできるだけ盛り込むこと」を提示し、これらのことを満たしながらで劇遊びを創りあげていくことを確認した。

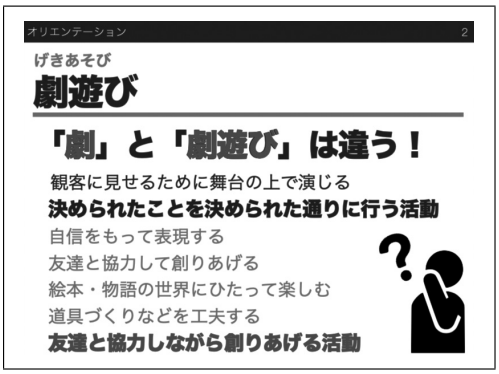

図６　劇遊びについての説明スライドの一部

学生はこれらの条件をもとに、まずは全体のストーリーを考えるところから話合いを始めた。３歳未満児という発達の過程を考え、楽しめる劇遊びにするためにはどのような内容にすれば良いかを話し合った。そして、親しみやすいアンパンマンをモチーフにし、３部でストーリーを構成した。また、子どもたちと一緒に手遊びやダンスをしたり、子どもがストーリーの中に入って一緒にバイキンマンを倒すシーンを設けたりと子どもを飽きさせない工夫を盛り込む計画を立てていた。

②小道具や大道具の製作（2/4）

第２時は前回、決定したストーリーに基づいて必要な小道具や大道具作りを行った。時間は限られていることもあり、劇を通して必要なお面や道具などは分担したり、役が複数人で分担されている場合には子どもに印象付けられるように色や衣装を工夫したりしていた。また、子どもと一緒にダンスをするときに一体感をもって楽しめるように演じる側と子どもを同じ道具を作成し、それを用いるようにしていた（写真３）。

写真３　一緒にダンスをする園児

③劇遊びの実践・修正（3/4）

第３時では、実際に劇遊びを通して楽しむ時間にしていた。しかし、実際は道具作りに時間を要してしまい、この時間も道具作りを中心に進めることになった。劇遊びについてさらに話し合う機会を設けた。劇遊びは本来、子どもの絵本や興味ある出来事から発想を得て、言葉や動きを自由に入れながら遊ぶものである。そこで、全体で行ったことは、劇の流れを確認する程度にして、台本を作ったもののそれに固執せずに、子どもの様子を見ながら話しかけたり、笑ったりして一緒に楽しむ姿勢を大切にすることを確認した。

④３歳未満児（ピーターパン北中山園の園児）との劇遊び（4/4）

３歳未満児を本学に迎えて劇遊びを楽しんだ。学生は子どもたちの目を見て、「楽しんでいるか」「健やかに過ごしているか」など、終始、子どもたちを気遣いながら劇遊びを行っていた。

子どもたちは劇中で、学生と一緒にクリスマスツリーのオーナメント飾り付けをしたり、バイキンマンを学生と一緒に退治したり、登場したサンタクロースと一緒にダンスをしたりと劇を見て楽しむだけでなく、身体を動かして楽しんでいた（図７）。そして、最後にサンタクロースからプレゼント（パン）をもらって劇遊びは終了した。

図７　劇遊びの劇中で身体を動かして楽しむ子どもたちの様子

Ⅳ．まとめ

保育内容Ｂの授業や保育実践を通しての学びや印象に残ったことについて、学生にアンケートをとったところ表４のような回答があった。

表４　保育内容Ｂを振り返ってのアンケートまとめ

保育内容Ｂの授業や保育実践を通しての学びや気づき
○　子どもへの臨機応変な対応に関する記述（７） ○　個に対応することの重要性に関する記述（５） ○　事前準備の重要性に関する記述（３） ○　子どもの年齢に応じた活動の重要性（３） ○　子ども理解に関する記述（２） ○　その他（２）
印象に残った活動
○　劇遊びのよる表現活動（６） ○　身近なものを用いた表現活動（４）

授業や保育実践を振り返っての学びや気づきについては、子どもに対して臨機応変に対応することや発達の過程、個に応じた対応をすることといった子ども理解の重要性に関する学びを深めていたようであった。具体的には、「なるべく子ども一人一人に目線をやること」「子どもの表情をよく見ること」「発する言葉に感情をこめることで伝わりやすくなる」などを挙げており、一斉活動として保育をする際に、大切にしなければならないことについての気づきが伺えた。また、事前準備の重要性にも触れている記述も見られた。事前の準備次第で子どもの活動は大きく左右されることを実感していたようであった。

最後に、学生の中に次のような記述があった。「実習明け、子どもたちと実際に関わる時間や保育者として子どもたちの前に立つ機会が久々だったので準備した時間の分、子どもたちが喜んで楽しんでくれるということを再確認し、保育者としての楽しさややりがいを改めて感じることができました。」「身近な素材やものを用いた表現活動」をテーマとして取り組んだ本実践であったが、学生たちは、幼稚園実習や保育所実習、施設実習を既に終えている経験の上で、本授業を迎えている。実習で経験し、学んだことや失敗したことなどを生かして実践活動に取り組んだ。そこで、保育をする上で大切なことや保育者としてやりがいを改めて再確認する機会になったのではないかと考えている。